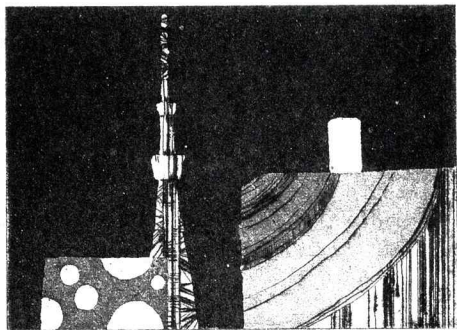


朝日 歌壇 俳壇



〈街かど 上野I〉 岩尾恵都子

●馬場あき子選

「勇氣ある国際的な女性賞」五ノ井里奈さんに贈るのは日本ではなくアメリカだった

（観音寺市）篠原 俊則

ロバに乗り通学する子のかたわらを静かに流れゆくナイル川 （東京都）増田 麻美

☆野うさぎをリユックサクに隠しているような弁当箱のぬくもり （奈良市）山添 聖子

アロワナがジャンプするらし真夜目覚めその首聴けば寂しき音に （川崎市）新井美千代

☆一斉に楽譜をめぐるコーラス隊春がそこからパツと始まる （富山市）松田 わこ

寒がりの猫には服を着せずして犬には着せる飼い主のエゴ （可児市）田上 勇嗣

隆起せし沿岸覆ふ波の花たかく低く存分に舞ふ （加賀市）敷田千枝子

Bランチ社食のメニューはちらし寿しはにかむようなミニ桜もち （富山市）松田 梨子

昭和区の神社の亀は鳴くという社務所で売られる餅をまくとき （名古屋市中区）山守 美紀

二月半過ぎて今なおそのままの倒壊家屋を包む豪雪 （五所川原市）戸沢大二郎

【評】第一首は日本でまだタブー視されている性被害を实名で訴えた五ノ井さんの国際的な受賞。下旬に作者の思いが強い。第二首は長大なナイル川流域のくらしの雰囲気草画風な景にある。第三首は野うさぎのぬくもりがよい。

●佐佐木幸綱選

塙保己一記念館訪ふ人もなく時折響く草刈機の音 （東京都）村上ちえ子

今更に早世惜しみ記事を読み壯年のままの高橋和巳 （長崎県）稲垣 妙子

「顔じゃない唄は心」と云っていたパープ佐竹をたまに聴きたい （長岡市）柳村 光寛

登山記を本屋へあまた売りのち一人一人の故人を偲ぶ （東京都）田中 康夫

ベランダの春の日だまり奪ひ合ふ亀も三匹寄れば騒がし （三鷹市）宮野隆一郎

餅切つて筵に干せば反り返る丹波の春の屋下がりかな （大和郡山形市）四方 護

☆一斉に楽譜をめぐるコーラス隊春がそこからパツと始まる （富山市）松田 わこ

美しき歌を描きつつ春耕の牛わらかな時間の中ゆく （垂水市）岩元 秀人

たくさんの通院患者の個々の名が番号となる病院ロビー （糸島市）椋野 清美

長尾氏と同じ紙面に我が歌の載りしことあり母に誇りき （朝霞市）岩部 博道

【評】第一～三首、人名が出てくる歌が並んだ。塙保己一は『群書類従』で知られる江戸時代中期の盲目の学者。高橋和巳は小説家で『邪宗門』などで知られ、一九六〇年代に活躍。パープ佐竹は低音の歌手として売り出し、「女心の唄」などがヒット。

●高野公彦選

海が好き漁はやめぬと若者の見つめる先に隆起せし浜 （那珂市）阿久津利江

家のなか妻の骨壺抱きながら各部屋歩く納骨の朝 （小金井市）神蔵 勇

「生きるとは」歌で示し長尾氏の辞世となりぬ視線入り （蓮田市）斎藤 哲哉

今月も僅かばかりの年金を使い果たして裏金なし （橋本市）秋月 晶江

飲み会に保護者の名も付いてくる妻は飲んでは座を盛り上げる （三郷市）木村 義照

異国にて老いゆく苦勞知るゆえか日系二世は親に優し （アメリカ）中條喜美子

行きがちがう顔みなわたしに解さずちぶえ達者な幼と歩けば （スイス）岸本真理子

孫悟空ヤムチャにベジータ亀仙人同窓会である名飛び交う （甲州市）麻生 孝

団子虫になりしと幼唄りて地震体験室より出で来 （下野市）若島 安子

ストリートビューに生家を訪へば老人ホーム隣りに建ちぬ （大阪市）末永 純三

【評】一首目、能登の地震で海辺の地盤が隆起し、漁が困難になった。でも諦めない若き漁師。二首目、これが最後と骨壺の妻に見せて回る優しさ。三首目、1月7日の歌壇に掲載された長尾幹也氏の最後の歌を通して氏の逝去を悼む。

●永田和宏選

悲しみとともに開かむ彼の歌載ることのなき日曜の紙面 （朝霞市）岩部 博道

この世代だれでも一人はアラレちゃんと呼べたメガネの友がいるよね （東京都）上田 結香

夏にしか日本を知らぬこの子らの浦安にいっも蟬がいない （スイス）岸本真理子

孫何か言いてみんなが大笑いわが補聴器は今日も不具合 （アメリカ）大竹幾久子

新刊は誰かが買って回し読みそれでも本屋が成り立ってた昭和 （大和郡山形市）四方 護

あの頃は傍にいただけ歩くだけそれがしあわせそれでよかった （糸島市）椋野 清美

今ならばとでもわかるよあの夜の電話の母は寂しかったのだ （横浜市）滝 妙子

納骨終え食事も終えて一人だけ遺影の妻の待つ我が家へ （小金井市）神蔵 勇

☆野うさぎをリユックサクに隠しているような弁当箱のぬくもり （奈良市）山添 聖子

住む人がゼロになるまで続けるといふのか今の二つの戦さ （京都市）泉月 直子

【評】一、二首目は、それぞれ長尾幹也、山田明さんの追悼歌。もはや紙面を開いても長尾さんの歌はないし、アラレちゃんも誰も知っているキャラクターだった。岸本さんは夏にしか子供たちを連れて帰省することができなかった海外生活を。

うたをよむ 桜の季節に

桜の季節が巡ってくると思惟れた一冊が私の手もとに置かれる。飯島晴子句集『春の蔵』である。初めて手にしたのも桜花のほころぶ頃。読み終えたその時の言い知れぬ解放感と高揚感は今なお鮮明に記憶に残る。以来二十有余年。いつしか私だけの年中行事のように繰り返されている。今年もまた、窓辺の満開の桜に誘われるように頁を開く。

春の蛇座敷のなかはわらひあふ、鶯に蔵をつめたくしておかむ

春の蔵でからすのはんこ押ししてあるひんやりと紗のかかる春の光を感じる作品群。現実の明るい春の光よりもさらに眩しく、そして仄暗い。まさに蔵の窓から差し込む春の光である。一句目で、その光は「座敷のなか」にも迷い込む。高らかに響き合う母娘らの笑い声。それも束の間、座敷の景は恐ろしく静かな空間に一変する。「春の蛇」の存在が妖しくも美しい。二句目、蔵の方に向きを変え鳴く鶯。ふと手にふれたつめたいた

桜。三句目、蔵の外は春爛漫の桜吹雪。幽かな光を背にして、からすのはんこを押しとは、何と不思議な光景だろう。三句ともに一瞬の光のような景だが、その実、物語にも似たたおやかな時間を秘める。それはやがて読み手だけのものとなり、愉悦のひとつが訪れる。「短くて完結する俳句」という詩型は、言葉が言葉になる瞬間の不思議さについて、思いを誘うものをもっている。「晴子著『俳句発見』の一節に俳句の醍醐味を探るヒントが見える。桜と『春の蔵』と私をつなぐ良縁はまだ絶やせない。」（門）主幸・俳人

「花巡る 黒田杏子の世界」 一周忌記念出版で、刊行委員会編。第I部は「黒田杏子のことば」で、本人の評文などを収録。第II部は「黒田杏子を偲ぶ」で、交遊のあった俳人や文化人らが寄稿。（藤原書店・3630円）

第41回兎丸現代俳句新人賞 現代俳句協会主催。楠本奇跡さん(41)の「触るる眼」(50句)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほか1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます。

風信